

岩倉使節団と新しい外交

1 / 1

飛鳥

奈良

平安

鎌倉

室町

安土桃山

江戸

明治

大正

今日の問い

政府は条約改正と東アジアとの関係づくりに、どのように取り組んだのだろう。

読み終えたら、最後の「問いへの答え」を見る前に、自分の言葉で答えてみよう。

1 岩倉使節団と条約改正

岩倉使節団

岩倉使節団

1871年に欧米へ送られた使節団。条約改正と視察を目的とした。

岩倉具視

使節団の代表(全権大使)となった公家出身の政治家。

条約改正

幕末に結んだ不平等条約を、対等な内容に改めること。

1871年、政府は**岩倉具視**を代表とする**岩倉使節団**を欧米に送った。**大久保利通**・**木戸孝允**・**伊藤博文**ら政府の中心人物が加わり、津田梅子ら女子をふくむ留学生も同行した。目的は、幕末に結んだ不平等条約の**条約改正**に向けた交渉と、欧米の国々の視察であった。

しかし欧米の国々は、日本の法律や制度がまだ整っていないとして、改正に応じなかった。使節団は約2年をかけて、工場や議会、学校などを見て回り、欧米との国力の差を実感した。帰国後、大久保らは国内の近代化を何より優先するようになった。

2 征韓論と東アジアとの新しい関係

東アジア外交

征韓論

武力を背景に朝鮮に開国をせまろうとする主張。

江華島事件

1875年、江華島付近で日本の軍艦と朝鮮が砲撃し合った事件。

日朝修好条規

1876年に朝鮮と結んだ、朝鮮にとって不平等な条約。

使節団の留守中、政府では、鎖国を続ける朝鮮に武力を背景に開国をせまる**征韓論**が高まった。しかし1873年に帰国した大久保らが、国内の整備が先だとして反対し、征韓論はおさえられた。このため薩摩藩出身の**西郷隆盛**や土佐藩出身の**板垣退助**らは政府を去った。

これより前の1871年、政府は清と対等な内容の**日清修好条規**を結んでいた。一方、朝鮮に対しては、1875年の**江華島事件**をきっかけに、翌1876年に**日朝修好条規**を結ばせて開国させた。この条約は、朝鮮の中で日本の領事裁判権を認めさせるなど、日本が欧米から押しつけられたのと同じような不平等条約であった。

条約	相手	内容
日清修好条規 1871年	清	対等な内容の条約
日朝修好条規 1876年	朝鮮	日本の領事裁判権を認めさせるなど、朝鮮にとって不平等な条約

問いへの答え

政府は1871年に岩倉使節団を欧米へ送って条約改正を交渉したが認められず、使節団は欧米の制度や産業を学んで帰った。帰国後は国内の近代化を優先して征韓論をおさえ、西郷隆盛・板垣退助らは政府を去った。東アジアでは、清とは対等な日清修好条規を結び、朝鮮には江華島事件をきっかけに不平等な日朝修好条規を結ばせて開国させた。

次は ノート で、下線に語句を書きながら確かめよう →

